

# 栄光

説教

## 『生きた水』

ヨハネによる福音書7章37節～39節

東洋英和女学院中学高等部教諭 上野峻一

説教・「生きた水」 上野峻一教師…1
特集・ペンテコステ 聖霊の働きを 感じる時…2
聖学院大学だより …3
説教・「死の陰の 谷を歩むとも」 岸牧師…6
子どもの日報告…7
長老のファイル…7
牧師の書斎から…8

主イエス・キリストは、立ち上がり、大声で言われます。「渴いている人は誰でも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」。人々は、非常に驚いたと思います。当時のユダヤ教の指導者たちは座って教え、語るのが一般的であったと言われます。また何より、それは祭りが最も盛大に祝われる終わりの日でした。

このように主イエスが立ち上がり、大声で語られたのは、恐らく祭りで行われた水くみの儀式があったからでしょう。だからこそ、人々にとって非常に印象に残っていた出来事、言葉であったはずで、旧約聖書のゼカリヤ書14章で

は仮庵祭の新しい意味が伝えられています。預言者ゼカリヤは、主の日、終末における神の決定的な救いの日に、エルサレムから命の水が湧き出ると記します。それゆえエルサレムで祝われていた仮庵祭で神殿の祭壇に水が注がれる儀式を意識して、主イエスは立ち上がり、大声でこの言葉を語られたのでしよう。

キリストは、ここで「生きた水」と言われます。今日の説教題も「生きた水」としました。とても不思議な表現に思えないでしょうか。「生きた」とは、もともとのギリシア語では現在形、生き生きしている様子を思い浮かべることができそうです。「生きている水」とも翻訳できます。まるで水に意志や命があるようです。ヨハネ福音書に

おいて「水」というのは、福音書を読んでいく上でのちよっとしたキーワードです。今日の聖書箇所よりも前、3章でキリストは、ニコデモに「誰でも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはいかならない」と言われます。ここに水と霊とがセットで出てきます。水に「霊」という命が吹き込まれると、生きた水となります。そして、生きた水とは、主イエス・キリストを信じることによって与えられる特別な「聖霊」を意味しています。それが川となって流れ出ます。

この流れ出た水によって、水と霊という聖霊、生きた水による川によって、私たちは今ここに新しく生きる者とされています。主イエス・キリストが、あの時、立ち上がって大声で言われた御言葉は、原文では「もし誰でも」という言葉が文頭に來ます。「もし誰でも、渴いている人なら來なさい」。イエスさまは、そのように立ち上がって大声で言われます。これは呼びかけの言葉です。そこにいた人々、そして、今ここにいる私たちに呼びかけられている言

葉です。今も昔も、主イエスが呼びかけられているのは渴いている人たちです。主は「誰でも、わたしのところに来て飲みなさい」と言われます。本当に文字通り、「誰でも」です。主イエスのところに行くのに一切の条件はありません。もし渴いているなら、そのことに気づいたなら、キリストのもとに行くのです。

それでは、どうしたら「わたしのところに来なさい」と言われる主のもとに行くことができるのでしょうか。それは38節、39節にあるように、「主イエス・キリストを信じる」ということです。聖書が証しするように、私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目に復活された主イエス・キリストを信じることです。本当にそれだけです。それが、主イエス・キリストのもとに來て、決して渴くことのない生きた水、聖霊によって新しく永遠の命に生まれることです。聖書は、実にシンプルにそのことを語ります。そして、主イエス・キリストは今も私たちに呼びかけられています。



# ペンテコステ

## 聖霊の働きを感じる時

ペンテコステの日、天から聖霊が降り、教会が誕生しました。  
見えないけれど、いつも聖霊は私たちに働いています。  
皆さんが聖霊の働きを感じるの、どんな時ですか。

### 聖霊が宿る教会

岡田みな子

聖霊という言葉は初めて聞いたのは8歳の頃、経堂北教会の日曜学校だったと思います。当時は薄暗い屋根裏部屋で分級が行われており、担当の先生が古い戸棚を開け「こんな所にも聖霊がいます」と言われたので怖くなり、生徒全員で悲鳴を上げました。

教会と私の関係は、母が昭和11年この経堂で家庭を持ったことに始まります。その翌年に、お隣の村田正亮牧師がご自宅で礼拝を始められたことは、学生時代に受洗していた母にとって、これ以上のお恵みはなかったでしょう。やがて戦争が激しくなってきたらば村田牧師とオルガン担当の母と2人だけの礼拝があったと聞いています。

昭和20年3月10日の下町大空襲の時は東の空が真っ赤に染まり、経堂一帯にも焼夷弾が落ち、当時島だった現在の赤堤小学校あたり

に米軍のB29爆撃機が火を噴いて落下し、庭の防空壕に避難しました。その後、私たちは秋田に疎開し終戦を迎えましたが、教会の礼拝はこの経堂の地で、ずっと大きな力で守られ続けて来ました。

「父・子・聖霊」の中で一番説明が難しいのが聖霊かもしれませんが、日本基督教団信仰告白の中には5回も出てくる「聖霊」という言葉はとても好きです。それは私にとって清々しい音楽であったり、家族や友人との会話の中で、目には見えなくとも慰め、励ましをくれるものです。そして礼拝で、み言葉をいただき、心を一つにして歌ったり、祈ったりする時、それは確信になります。困難な時にも「ここには確かに聖霊が宿っています。私たちが導いてください」と感謝して祈る自分でありたいと願っています。

先日来、教会の北側道路で下水道工事が行われていました。最後の舗装工事が終わった時「お世話様でした」と声をかけると、箒を持った工事の方が「教会の前だからね。きれいにしておかなきゃね!」と言ってくれました。

## 新しい命

加藤玲奈

私が洗礼を受けたのは、2004年2月でした。20代の頃に相次いで両親を亡くした後、聖書の御言葉が心に強く響くようになり、一日でも早く受洗したい思いで、イースターを待たずに受洗しました。

しかし、年月が過ぎるにつれて、受洗した時の気持ちも薄れ、聖書の学びは深まらず、神様にすべてを委ねて生きることがなかなかできずにはいました。頭の片隅で、どこか神様を疑っていたのです。

この2年間は、コロナ感染症のパンデミックにより、自分ではどうにもできない状況を経験し、神様を信じて一日一日を歩むこと、それしか出来ないと感じるようになり、それしか出来ないと感じるようになりました。

これまで、神様に全てを委ねて生きることでできなかった自分が、やっと、一片の疑いもなく神様を信じていることが出来るようになった

ことが、コロナ禍での恵みです。

最近、『日めくり ヘブンスドロップス』(文・イラスト みなみ ななみ)という日めくりカレンダーを、毎日めくりながら励まされています。聖書の御言葉が、みなみさんの言葉で言い直されていますが、いくつかご紹介いたします。

「戦いや争いのかわりに、ともに歩く道を探して行く」(マタイ5章9節)

「辛くても大切な通り道 すばらしい光がほんの少し先で待っている」(1ペテロ4章12節)

「横になる 眠る 目が覚める それもまた神様が支えてくれたこと」(詩編3編6節)

聖霊の働きは常に身の周りで起こっているのだと思います。キリストが死者の中から復活され、私たちの側で生きて働いてくださっているからです。

日が経つても亡くなった母のことを毎日のように思い出します。母が、聖霊によって私の側で生き続けているのかもしれない。日めくりカレンダーのように、日々、新しい命に生きることが出来たらと思います。

## 両えくぼでニカッ

佐々木慶太郎

使徒言行録の中で、2章の教会

の基になった聖霊降臨日の記述と10章44節以下の「異邦人も聖霊を受ける」という記述と、16章13・14節の「主が彼女の心を開かれたので」というパウロの宣教を注意

深く聞いていたりディアに関する記述が、私には印象的です。前の二つは、そこに居合わせた多数の人々が共通して保有していた感性

に聖霊が働きかけた話であり、もう一つは、大勢の中の特定の一人の感性に聖霊が働きかけたという話です。時には特定の何人かにと

いうこともあり得るでしょう。ここで大切なことは、何故その人が選ばれたかということ。人間

世界での物差し、例えば学業成績が優れているといったものは、神様の物差しにはなりません。

この3つに共通しているのは複数の人々による神を称えるための集いで起こったということ

が、祈りの場でなくても、たった一人であっても聖霊が働くことがあるのではないかと思います。話は変わりますが、「歳を取ったら、極力口角を上げて」と言われますね。私に起こった次の出来事も、聖霊の業だったのかな？

「イーっ」と言っても口角は十分上がりません。結局口角を上げるにはスマイルが必要なのですが、ニコッでは引きが足りないのです。ある日鏡を眺めながら、様々のスマイルをしていると、突然、「ニカッと笑ってみたら」と聖霊が囁きました。やってみたら、口角が目いっぱい上がり、目までがパツと開く感じになりました。私の両頬にはえくぼがくっきり浮かび、80代後半になっても全て自前の上歯もはつきりと現われました。『あさイチ』の博多大吉さんも両えくぼの魅力的な笑いの持ち主ですが、私も負けませんよ。

残念ながらコロナ禍未だ去らずの現在です。マスクの後ろでニコッとするしかない毎日が続きます。ニカッと笑う顔を白日の下で見せられる収束の日が一刻も早く到来しますようにと神に祈ります。

## 私の聖霊体験

## 牧内 歩

私が最も聖霊を強く感じたのは受洗を決めたときです。

当時は高校生になったばかりでしたが、全国連合長老会主催の青年修養会で出会った素晴らしい友人たちを与えてくださった神様に心から感謝するようになり、更に聖書の教えについて改めて深く学ぶ機会を与えていただいたことで、日常から祈る回数も増えていました。受洗を強く意識し始めました。

そこからCSの礼拝だけでなく、主日礼拝にも毎週出るようになりました。しかし、CSと比べて遥かに難しい説教の内容と長い説教時間に慣れず、説教中眠くなってしまうことも多かったです。何週か経った時に、讚美歌を歌っていて寒気のようなゾワゾワとした感覚がありました。それだけでしたが、その時はそのゾワゾワが自分に神様が洗礼を許してくれ

た合図のような気がして、礼拝が終わった後すぐに岸先生に「受洗をさせてください」とお願いしに行きました。

たったそれだけのことでしたが、自分ではその聖霊体験を忘れることはないと思っています。

最近はずっと青年の結婚が続きました。祝福に満たされた結婚式に出席するたびに、聖霊の働きを強く感じるようになりました。それはまた普段の礼拝や受洗の時に感じたゾワゾワとは違う温かい聖霊を感じます。祝福される新郎新婦を見ると、今だけは世界中が平和なんだろうなと思います。

また、おめでたや出産報告も増えています。今から育つ新しい命がこの不安定な世界で平和に強く育つよう聖霊が与えられることをお祈りいたします。

私自身、聖霊が与えられて今の暮らしがあることに神様へ感謝しなければいけないと思います。

## 聖霊の働き

## 真下健人

「聖霊の働き」とテーマが書かれたメールを見て、最初に思い浮かんだことは、非常に不謹慎で、かつ誤解を招く言い方ですが、「聖霊の働きって、しつこい、めげない、あきらめない」でした。もちろん「良い意味で」です。

少し前に、ひよんなことからエッセイ「少し前に、ひよんなことからエッセイ」を執筆した。人にもよるのでしょうけれど、私には、これ、かなり厄介です。記入するために、生まれてから本日まで、いわゆるこれまでの半生と、今後と、その後のことを考えざるを得ないのですが、いろいろと悶々としてきました。ぜんぜん書けない、埋まらない。実は、その作業中に今回の原稿依頼につながることに、ちよūdōいろいろな気づかされたのでした。

教会から、礼拝から離れて、かなりの期間があります。その間、全く忘れていた訳ではないので

す。ほんの些細なことから連想ゲームのように必ず脳裏に蘇ることがあります。まるで、「忘れちゃった?ここにいるよ!」と言うように。面倒くさいから忘れてしまおうとすればするほど、逆にいろいろと思いつくのです。始末に負えないです。

教会や礼拝から離れてもずっと残っているのは、四竈揚先生がご紹介くださった「ニーバーの祈り」、そして母がくれた『赤毛のアン』の最後の一説「神は天にあり、世はすべてこともなし」(ブラウニングの詩の一節と後で知りました)です。ニーバーの祈りは、何度も無意識に頭に浮かんできていて、時にはそれを口にしていたりしています。『赤毛のアン』の一節も同じです。何かを言い聞かせる時に自然に出ていました。

今回、このテーマで思わず合点が行きました。「ああ、聖霊の働きは常に在る、そういう存在なんだ」と。でなければ、エンディングノートでいろいろ考えたその矢先はこの依頼なんてなかったでしょうから。やはり、「あきらめない」とこれまた納得しました。

## 聖学院大学だより

この4月  
に埼玉県上  
尾市にあり  
ます聖学院  
大学のチャ

プレンに就任しました。聖学院大

学は、主イエス・キリストが語ら  
れた御言葉に基づき（マタイによ  
る福音書22章34〜40節）、「神を仰  
ぎ人に仕う」という建学の精神  
に基づいて、1988年に開学し  
ました。現在、政治経済学部（政  
治経済学科）、人文学部（欧米文  
化学科・日本文化学科・児童学科）、  
心理福祉学部（心理福祉学科）の  
3学部5学科の下、約2300人の  
学生が学んでいます。

チャプレンには、大学チャプレ  
ンと学部付きチャプレンがあり、  
私は心理福祉学部付きのチャプレ  
ンです。また、大学教員としては  
5クラスの授業を担当しています。

チャプレンとしては、授業期  
間中の火曜日から金曜日に行わ  
れる全学礼拝（対面とオンライン  
）の奨励や司会を担っています。  
また、キリスト教関連クラブ

の顧問もしています。具体的に  
は、SCF (Seigakuin Christian  
Fellowship) とボランティア・ア  
ソシエーション（通称：グレイス）  
の顧問です。また、水曜日は会議  
日となっており、教授会や学科会  
をはじめ、その他の会議に出席し  
ています。

授業は5クラス、約3000人の  
学生を相手にしています。キリス  
ト教関連科目は必修が多いので、  
必然的に履修者が多くなります。  
ただ、学期が進むにつれて授業に  
出席しなくなる学生もいるので、  
現在はもう少し少ない人数です。

4クラスは、「キリスト教概論」  
です。1年生の必修科目でオンラ  
インでのオンデマンド授業です。  
約2000名が履修しています。一  
つの授業を作成し、4クラスに配  
信する形式です。パワーポイント  
で授業素材を作成し、それを約20  
分ずつ4本の動画にして配信。そ  
れを視聴した学生たちは、リアク  
ションペーパーと呼ばれる感想文  
をオンライン上に書き込みます。  
それに対して私がフィードバック  
を書き込み、そのリアクション  
ペーパー上での疑問や質問で共有

した方がよいものを、次回の授  
業動画の最初の部分で入れ込みま  
す。動画撮影は日曜日の夕方から  
夜にかけて行い、月曜日と水曜日  
に配信できるように設定します。

もう一クラスは、「キリスト教  
人間学」という対面授業です。心  
理福祉学部の3年生の必修科目  
で、約1000名が履修しています。  
春学期では「十戒」を取り上げて  
います。秋学期では「主の祈り」  
を取り上げる予定です。ここでも  
各授業の後に、リアクションペー  
パーを書いてもらって、次の授業  
の最初の部分で共有するようにし  
ています。

オンライン授業でも対面授業で  
も、一番大変なのは学生一人ひと  
りへのフィードバックです。しか  
し、学生からの感想が多種多様で、  
良い意味でもとても考えさせられる  
時となっています。例えば、教会  
で当たり前に使われている「恵み」  
という言葉も、初めてキリスト教  
に触れる学生にとっては何が何だ  
か分かりません。それをどのよう  
に説明するかは、自らの神学的理  
解が問われることとなります。

チャプレンとして、また、教員

として特に心がけたいと思ってい  
るのは、愛に根ざして真理を語る  
（エフェソ4・15）ことです。そ  
のことを通して、全学礼拝や授業  
において、学生一人ひとりが救い  
主イエス・キリストに出会って欲  
しいと祈り願っています。

宇都宮教会にも引き続き仕えて  
いるため、当たり前のことですが、  
必ず毎週日曜日の説教は巡ってき  
ます。正直、大学のことと教会の  
務めの両立に苦心しています。た  
だ、教会のことは何をやるべきか  
分からないことはないのです、その  
ところは幸いしています。

宇都宮教会の皆さんに加えて、  
新たに約300人の若い教会員が  
与えられたという気持ちでいま  
す。特に大学でのチャプレンとし  
ての働きが、広い意味での牧会に  
通じるのではないかと考えていま  
す。（木村太郎）



## 説 教

## 『死の陰の谷を歩むとも』

詩編23編1節～6節

岸 俊彦

伝道師、牧師となって今年で40年目です。牧師の仕事として大変だと思うのは葬儀です。葬儀は突然やってきます。

葬儀の時、詩編23編をよく読みます。6節には「主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであらう」と書かれています。主の家とは神殿のことです。私たちが教会のことです。さらに言うところ私たちの人生の終わりの先にある天国のことです。私たちは一生懸命生きて、最後、天国に帰りま

す。天国は私たちのまことの故郷です。教会は天国の先取りです。聖書は死後の世界について詳しく教えるわけではありません。確かにパラダイスのイメージを与える所があります（2コリント12・4）。また主のもので、天に召された者が礼拝している光景を伝えます（黙示録4・10）。礼拝するところが天国です。礼拝で神の言

葉である聖書に聞き、祈り、賛美することは天国の先取りです。

「わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる」（詩23・5）。どんな敵なのかよく分かりませんが、詩人は敵と戦っています。

今、現実には戦争が起こり、戦火の中にある方々の悲惨、苦悩は計り知れません。戦争が一刻も早く終わるようにと祈るばかりです。

現実の戦争とは比べようもありませんが、私たちは様々のことで日夜奮闘しています。奮闘するためにはちゃんと食事をして、栄養をと、体力をつけなければなりません。終わりの日まで、この地上の旅を全うするためです。私たちの日々の奮闘を支えるのが神の言葉が与える恵みと慈しみです。腹ごしらえができれば人は落ち着くことができます。落ち着いたら静かに判断することができます。

何が正しい情報か判断し、自分は何ができるか、何をなすべきか、静まってこそ決断できるのです。「信じる者は慌てない」（イザヤ28・16）と言われるところで

「死の陰の谷を行くときも」（4節）と記されています。戦争あり、コロナ禍のため、また人生の様々な困難と、私たちは「死の陰の谷を行くとき」を経験させられています。詩人のように、私たちは「わたしは災いを恐れない」と果たして言うことができるでしょうか。

その続きがあります。「あなたがわたしと共にいてくださる」。この主の恵みと慈しみに、私たちは頼り頼むことができます。「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける」と信じてよいのです。鞭も杖も、羊飼いが狼などの外敵から羊を守るための道具です。神が共にいて、生きている時も、死ぬ時も、死の先でも、私たちを守ってください。

先日101歳の方の葬儀をしました。危篤と知らされてご自宅に伺い、その方の傍らで詩編23編を読み、祈ることができました。お孫さんは「おばあさんが復活する

のではないかと期待したそうです。残念ながら、また申し訳なかったのですが、復活されることはありませんでした。

酸素吸入のマスクをあてて苦しうにされてしまいました。意識は混濁してしまいました。しかし、詩編23編を読みながら、聖書に伝えられた神の言葉こそが死に逝くもの到最后、慰めを与え、御国を確信させるのだと感じました。集まっている私たちの中に、主なる神の平安と静けさが実現していると思えました。主の御名のもとに集まり、祈るところ、主と共にいてくださいます。主がその方を天に迎え入れてくださるのは本当のことだと思わされました。

生きる時も死ぬ時も、最後の最後に私たちを慰め、励ますことができるのは、私たち人間の言葉ではありません。主の言葉です。神の言葉です。主が、その恵みと慈しみによって、私たちをもてなしてください御言葉こそが私たちの慰めです。この主の恵みは私たち一人一人にも注がれています。（青山学院大学相模原キャンパス 礼拝説教）

## 子どもの日報告

子どもの日合同礼拝の講壇に、子どもたちの活けた花かごが戻ってきました。3年ぶりに目にする、明るく元氣溢れる光景です。花かごご指導の志磨恭子姉が、大学生や教師たちに「ずっと作ってきているから大丈夫よね（腕は鈍っていないわね）？」のかけ声。「大丈夫です！」の軽やかな返答。ただそれだけのことで涙腺が緩みかける感激屋の私。

一昨年は小・中・高校の全国一斉休校中につき、教会学校も休校中でした。昨年は緊急事態宣言下でありましたが、大人の信徒とCS生徒が共に祈りを合わせることが叶いました。

しかし長年、子どもの日合同礼拝の象徴となってきた花かごが礼拝堂に並ぶことはありませんでした。子どもが教会に滞在する時間をできうる限り短くしようと、常に緊張の中にあつた昨年の春を思い出すと胸がぎゅつとします。

そして今年、ついに礼拝前に花かごを作る時を持つことが叶いました。一歩ずつ明るい方へとCS

も進んでいます。

例年は近隣の交番、駅、消防署、有隣ホームに、成長を見守っていただいているお札に花かごを持参しますが、今年はそれぞれ自宅に持ち帰りました。ご家族への素敵な贈り物となったことでしょう。

自分が神様に愛されて、沢山の方々に祈られている大切な存在であることを知ってほしい。大人たちは願いを込め、子どもたちの背中を見つめつつ讚美歌を歌います。歌声をセーブしているので、例年のような、当教会が誇る大音量ではありません。それでもきつと神様にも子どもたちにも思いが届いたことでしょう。（石室優子）

## 長老のファイル

4月の総会選挙で選任された長老と、前年度の長老の新旧長老会が5月8日に開催され、新しい体制での役割分担も決まりました。長老会一同、また新たな気持ちで、この1年間の教会活動に勤しんで参ります。

さて、教会総会でも報告させていただきましたが、昨年度も教会活動が抑制されたため、伝道・集会費や教会学校費、行事費等の諸費用は予算比大幅な未達でした。

コロナ前（2019年度）の決算と昨年度を比較すると、伝道・集会費はコロナ前の75万円に対し、昨年度は23万円で3分の1に過ぎません。また、教会学校費はコロナ前に28万円でしたが、昨年度はわずか1万円でした。行事費も40万円に対し15万円です。懇親会・送別会の類は一切開けず、残念ながら、狩野進之佑先生の送別会も開催出来ませんでした。

一方、コロナ禍の影響はまだ続き、マスクは手放せない状況ですが、街中にも人が溢れ、テレワー

クから出社に変わるなど、人々の活動がかつての日常を取り戻してきた感があります。コロナによる自粛で支出実績は低くなりましたが、慎重に進めつつも、懇親会や教会コンサート、教会学校行事等の伝道に繋がる活動等も再開されることを見越し、以前ほどではないにせよ、活動のための予算も確保しております。

また、教会員数が減少し、高齢化が進むなか、経堂北教会に限らず、若い世代の教会員の維持・増加が不可欠です。

先般、岸先生よりお伝えいただいた通り、東京神学大学への援助の内、東神大キャンパス募金への献金は終了いたしました。東神大の学生も減少傾向にあり、皆様には献金で支えていただいておりますこと、感謝申し上げます。

本年度は岸先生の教職一人体制で人件費は下がり、黒字予算で計画していますが、老朽化が進む会堂対策、今後の伝道活動の再開、将来を見据えた対外援助の継続のため、皆様には引き続きご理解・ご協力の程、お願いいたします。

（門田浩一郎）

## 個人消息



## 牧師の書齋から

5月15日、狩野進之佑牧師を招聘してくださった愛知守山教会の古田正次長老が礼拝に出席してくださいました。今回の招聘に関して何度かメールで連絡し合っていました。これまで狩野牧師を含め6人の牧師を派遣していますが、一番丁寧な長老会でした。招聘のお願いから始まって、当教会での辞任承認に対する御礼と今後の予定など、折々にご連絡くださいま

した。そして御礼と報告のため、前泊で当教会にいらしてくださいることなども考えもしないことでした。

礼拝後の古田長老のご挨拶には一同感激しました。前任者が隠退後無牧となり、地域の教会に助けられながら長老会を中心として教会を守ってきたのでしょうか。コロナ禍も無牧にもかかわらず礼拝を休むことはなかったと聞いております。長老会はもちろん、教会員が一つとなって祈りを合わせ牧師招聘の準備を進めてこられたのでしよう。前任者の隠退後2年間招

## 掲示板



- 初夏の集い 6月26日(日) 10:15 ~ 13:00  
講師 菊地 順 聖学院大学特任教授
- 振起日礼拝 9月4日  
説教 左近深恵子牧師 (美竹教会)
- 説教予定  
7月10日 中村謙一 聖学院小学校チャプレン  
8月14日 久保哲哉 聖学院中高教師  
9月11日 上野峻一 東洋英和女学院中高教師

## 編集後記



▽私が聖霊の働きを強く感じたのは、30年前教会に通い始めた頃です。その頃に教会に導かれた同僚は今ではキリスト教の教師となり、友人は牧師夫人になりました。(酒井)

聘のためにご苦労されたことを古田長老のご挨拶から十分感じることができました。狩野牧師の転任は御心だと改めて思わされました。長老、教会員と祈りを合わせ伝道と牧会に狩野牧師が励まれるよう聖霊の支えと導きを祈ります。「伝道師を育て牧師として送り出す」ことを方針として、牧師・伝道師の体制で長老会を中心として伝道、牧会にあたってきました。これまでは送り出した牧師を通して教会同士が繋がるというのが実情でした。今回は牧師招聘がきつ

かけで直接教会同士が結びつけられたと感じました。私たちの方針が具体的な教会の結びつきとなったことを実感させられました。今年度は教勢、財政の点からこの方針を維持できませんが、「共に祈り、共に伝え、共に献げよう」をこれからも具現化して行きたいと思えます。この国では少数のキリスト者と教会だからこそ、主のもとに一つとなる祈りと努力を欠かすことはできません。小さい群れだからこそできることがあるに違いありません。(岸 俊彦)

「栄光」2022年6月号  
日本基督教団 経堂北教会  
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11  
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038  
牧師：岸 俊彦  
編集：栄光編集委員会  
Email：kyodon@nifty.com  
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp